

氏名	高橋 庸平 (タカハシ ヨウヘイ)		
学位の種類	博士 (芸術)		
学位記番号	甲第 76 号		
学位授与日	平成 31 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	震災に向き合うイラストレーション・ポスター —記憶の保持と記録の活用を促す表現の二面性を巡って—		
審査委員	主査	教授	濱田 芳治
	副査	教授	小川 敦生
	副査	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科 准教授	澤田 雅浩
	指導教員	教授	秋山 孝

## 内容の要旨

世界でも有数の地震多発国である日本では、災害が発生する度に被災状況を教訓として残してきた。近年の災害においても情報の蓄積は引き続き行われているが、時間の経過とともに情報の風化も同時に進行している。本研究では、こうした情報の風化を被害を大きくする人災のひとつに含めた〈震災〉をテーマに据える。

災害の教訓を継承する方法に関しては、先例として情報システムや文化の構築という観点からのアプローチが見られるが、情報を人々に伝える表現者の視座に関しては、これまで研究されたことはない。筆者はこれまで、社会問題をテーマにしたイラストレーション・ポスターの創作に取り組み、発表を重ねてきた。本研究でも、筆者自身が経験として行ってきたイラストレーションの創作表現を中心に論の展開、検証を図る。

筆者はイラストレーション・ポスターを消耗品ではなく作品として捉えている。この姿勢は、作品としてのポスターは保存対象となるものであり、後に図版として複製されることでイメージが拡散し続けるという考えにもとづく。そのため、展覧会発表を中心とした創作活動を継続的に行ってきた。

その活動の一環として、2009年から多摩美術大学で行われている地震ポスター支援プロジェクトに参加している。このプロジェクトでは災害を忘れずに記録することを目的に、毎年イラストレーション・ポスターの制作と発表、記録を続けている。その経験から震災の風化を防ぐ表現方法として2つの切り口を見出した。

ひとつは不特定多数の人々に情報を焼き付ける〈コミュニケーション対象の広い〉表現であり、もうひとつは具体的な場面を想定させる〈コミュニケーション対象を絞った〉表現である。そこで本研究では、これらの二面性を組み込んだ表現方法をまとめることで、震災の風化による被害を減らすための方法論へと導いていく。その最終目的は、グラフィックデザインの一分野であるイラストレーション・ポスターを用いて、震災の風化による被害を減らすための方法論を確立することである。

はじめに〈コミュニケーション対象の広い〉表現に求められる要素の考察として、ポスター

に焦点を当てた。先行研究を手掛かりに社会的役割や効果を示しながら、ポスターと震災をつなぐキーワード〈社会〉を軸に歴史を捉えた。ポスター表現の魅力のひとつは、社会が抱える問題の存在を広く知らせるため、人々の興味や関心を引きつけている点にある。そのため異なる文化圏でも理解できる簡潔さによって社会の風潮を象徴する形や社会構造を捉えていることを紐解いた。

次に、〈コミュニケーション対象を絞った〉表現が果たすべき役割を示すため、被災経験の多い日本に数多く残る記録を震災表現と位置づけた考察を行った。その歴史からは現実的な対応を促す情報の蓄積が伺えた反面、情報過多でありネガティブさを含むため、必要な情報にアクセスしづらい状況が読み取れた。そこからネガティブなイメージを伴わずに必要な情報を省略または誇張し、受け手と震災とをつなぐ場面にイラストレーション・ポスターの役割があることを示した。

さらに、イラストレーション・ポスターがもたらす効果の考察として、地震ポスター支援プロジェクトの事例分析を行った。多摩美術大学3年次の学生作品からは、震災のイメージを着実に重ねることで長期的な視野で俯瞰できるというプロジェクト継続の価値を読み取ることができた。また、本研究の実践として企画した「千代田区と地震」展の出品作品では、地域の特徴を捉えて震災を人々の生活と結びつけるという、受け手と震災をつなぐビジュアルコミュニケーションの役割について示した。

そして、これらの二面性を巡る試行錯誤を行ってきた自作の展開事例を示した。過去の制作では、余分な要素を削ぎ落とすモチーフの変形を〈コミュニケーション対象の広い〉表現として用いてきた。この表現方法で〈コミュニケーション対象を絞った〉震災の表現に適用した所、ネガティブなイメージの強調につながった。しかし、風化途上にあったモチーフからポジティブな可能性を抽出することで、震災に向き合う取り組みの魅力を示唆するという二面性を組み込んだ表現方法に至ったため、その経緯を詳述した。

最後に結論として、震災への興味や関心を引くための表現方法の数々をイラストレーション・ポスターに求められる〈コミュニケーション対象の広い〉表現と〈コミュニケーション対象を絞った〉表現を組み込む方法論をまとめた。

この表現では、長い時間をかけて「災害を忘れず」という気持ちを確実、かつ着実に人々に根付かせるため、受け手に事実を突きつけるだけでなく、心を引きつけて揺り動かす魅力を備える必要がある。こうした活動を継続し、社会の中でイラストレーション・ポスターの有用性や地位を確立させることを目指すことで、震災とそれに向き合う人々をつなぐ役割において、イラストレーターとしての力を社会に還元できると考えている。

## 審査結果の要旨

著者の高橋庸平さんの博士研究のテーマ「震災に向きあうイラストレーション・ポスター」は、そもそも高橋さん自身の持つ「自らの知識や経験を社会貢献できることに活かしたい」という使命感のような想いから導かれている。社会・政治ポスターというフィールドで、これまでに世界的ポスター展の作品を丁寧に分析してきた経験を持ち、その研究成果を自作品の制作に活かすことで、国内外のコンクールで多くの受賞、入選を成し得ている。東日本大震災を経て、日本が地震国であることを痛感し、そのことが地震に関する表現研究に絞って研究に取り組むきっかけとなっている。

地震では一般的に地面の揺れによる崩壊や倒壊がイメージされるが、実際には火災や津波のような地震と連鎖する被害の方が犠牲は大きい。そのため、高橋さんは人の油断や不注意によってもたらされる人災まで含めた「震災」をテーマに据えて研究に取り組んできた。これまで

震災を人々の記憶に遺すための伝承、コミュニケーションの分野は、ほとんど研究が行われていない。その意味でも高橋さんの研究は、社会的にも期待されるところが大きい。

研究は第一章で震災についての詳述や、被災地の遺構、被害の記録状況をリサーチ。第二章でイラストレーション・ポスターの歴史を振り返り、その変遷と社会の中での役割、効果を紐解いている。ポスターのカテゴリーの中でも〈社会〉を軸に読み取りを行い、情報の風化を防ぐ対象の広いコミュニケーションの手段として、ポスター媒体の効果を示している。第三章で被災経験の記録として様々な震災表現を分析し、第四章で地震ポスター支援プロジェクトのために制作されたイラストレーション・ポスターを事例として、ビジュアルコミュニケーションの工夫について検証している。第五章で自作での制作トライアル、制作手法を振り返り、最後に結論として、イラストレーション・ポスターを震災の情報風化を防ぐための手段として用いる場合の意味や効果、方法論をまとめている。

研究全体を通して、理論研究と作品制作とが相乗することで、独自の視点を踏まえた博士研究となっており、審査員の総意として作品、論文共に高い評価であった。その研究プロセスの要点を以下に記載する。

ビジュアルデザインの手法論では、「伝える情報／内容をどのように視覚表現するか？」という技法や表現の新規性の観点での研究が多数を占めるだろう。しかし高橋さんの「震災に向き合うイラストレーション・ポスター」の研究では、まず「伝えるべき情報／内容とは何か？」についての掘り込みが必要だった。その意味するところは、例えば「地震に関するポスターの制作」を行う際に、ここにも「地震」と言う伝えるべき内容がある。「地震」と聞いてすぐに思い浮べるイメージや情報をイラストレーション・ポスターのモチーフに用いることは、多くの一般の人々にとって同じように地震を思い浮べ易いものであるため、人々の共感を得るといふ意味では効果のある表現となる。事実、この博士研究を始める前に取り組んでいた地震ポスター支援プロジェクトでも、「地震」をテーマにモチーフを探して、高橋さんはイラストレーション・ポスターを数多く制作している。

しかし「地震」のような言葉として大きい括弧を伝えるだけでは、「震災」を伝達する情報として内容が足りていない。人々の予想をはるかに超えて来る大規模自然災害、震災が発生した際に、被害を少なくするための情報伝達としては足りないのである。高橋さんは被災地を実際に訪れ、「震災で伝えるべき情報」「震災で伝えないとならない情報」に直面した。震災遺構の示す「人が太刀打ちできない自然の圧倒的なエネルギー」「甚大な被害」。被災地から戻ってしばらくの間、高橋さんはそうした「このリアルな情報をどう伝え遺すか」に思考がシフトしており、その結果として、震災遺構をモチーフとして忠実に描いたイラストレーション・ポスターを何枚も制作した。そして、それらのポスターをシリーズ化することで、制作意図、震災遺構の持つ重みのようなものをリアルな情報として伝えようとしていた。しかしこれらの作品を正確に理解するには、被災地の震災被害の情報を少なからず知っている必要があり、作品だけでは「何を訴えたいのかがわかりにくい」という側面があった。

もう1つ被災地で知り得た情報に、震災の被災者心情があった。震災の記憶は、人々の中で頭の片隅では常に気に掛かっていることだろうが、身内や親しい人が亡くなるなど、辛い経験から震災のことを蒸し返して欲しくないと考え人々も少なくない。そうしたとてもデリケートな側面を持つため、高橋さんは震災の遺構の中でも、人が亡くなっていないものを選択してイラストレーション・ポスターのモチーフに用いるなど、被災者の心情に配慮していた。

但し、ここで矛盾が生じる。ポスターでの震災表現では、震災を記録として遺すだけでなく、人々の頭の中に記憶として遺す必要がある。震災に伴う津波など、避難を必要とする災害に対しては、人々の記憶に遺さなければ、いざという時にそれが教訓として活かないからである。

高橋さんの作品表現における発想のブレークスルーは、墨田区の現在は使われていない風化した当時の防災設備「路地尊」のサンタイガーポンプをイラストレーション化した作品から始まった。具体的に見出した手法は「キャラクター化」である。論文に、このプロセスの詳述

があるが、イラストレーション・ポスター自体が持つ人を惹きつける力に、更に遺構をキャラクター化する表現が加わることで、遺構の情報を詳しく知らない人にも、記憶の中にスッと入り込む存在へとイラストレーション・ポスターが昇華する。これはむしろ従来の伝え方とは順序が逆になり、まずイラストレーション・ポスターのキャラクターに対して、人々が興味を覚えて、その作品の背景にある意図を、興味や関心によって読み込むというアプローチになる。この方が、多くの人々の記憶に遺しながら伝達できる可能性を高められるかもしれない。

イラストレーション・ポスターに求められるのは、真実の正確な情報伝達ではない。もちろん、ケースバイケースで、それが求められることはあるだろうが、それよりもむしろ重要になるのは、観賞者にまた見たいと思われること、長くその場に貼ってあってもいいと思われることにあるだろう。人とポスターの距離を近づけることが大事なポイントになる。イラストレーション・ポスターの利点は、伝えたいことだけに表現の要素を絞り込み、誇張と省略が行い易いことが挙げられる。これまでの制作経験から、そのことを高橋さんは熟知しているため、選定したモチーフの輪郭の抽出方法などで、独自の手法論を用いてイラストレーション表現を行っている。

高橋さんは、発生した震災被害を教訓として伝え遺すことに加え、現在行われている防災の情報を伝えるイラストレーション・ポスターの制作にも取り組んでいる。地震ポスター支援プロジェクトの展示発表を継続的に続けていく中で、自治体の防災担当の方々とのつながりが生まれ、そのやり取りの中から、防災のイベントでのイラストレーション・ポスターの出展の機会が得られた。想定のパスター提案に「実用性」が合わかり、ここもこの研究の有用性が高まるポイントとなった。

まとめとして「コミュニケーション対象の広いアプローチ」と「コミュニケーション対象を絞ったアプローチ」の2つの対象に対して、それぞれに必要な要素を提示して異なる表現アプローチで伝達を試みており、この区分け／整理のつけ方は秀悦で、デザイン論としても確立できている。とりわけ作品に関して、研究の最後期に制作した防災視点のイラストレーション・ポスター「防災運動会」「韋駄天競争」は、鮮やかな色調と洗練されたシェープによる構成でとても目を惹く作品として高く評価された。「防災運動会」のバケツリレーをテーマにした6枚組の作品は、アニメーションを見ているようで面白く、「災害」「防災」「復興」を想起させる装置としての役割を示すポスターとなっている。高橋さんの研究は、理論研究と作品制作とが相乗したクオリティの高さが見受けられ、審査員の総意として、本論文を学位を授与するに相当すると認める。

(濱田 芳治)